

特集 「編集委員 2007年の抱負」

第一印象を踏まえたかけがえのない人工物の実現を目指して

小松 孝徳

公立はこだて未来大学システム情報科学部



テレビ番組に見た人間・人工物インタラクションの真髄
皆さんは、女優・エッセイストとして著名な黒柳徹子氏が、ソニーのペットロボット AIBO の熱心なオーナーであることはご存知でしょうか？ 私は数年前、何気なくテレビを見ているときに、その光景を目の当たりにした。

とあるトーク番組。彼女の熱烈な愛情を示すかのようにかわいい「おべべ」を身にまとった AIBO と、それを慈しむように抱きかかえている黒柳氏。あるタレントが「これは、お手なんかもできるわけですよね？」と話しかけると、「もちろんです！」と笑顔で答える黒柳氏。煌々と照明が照らされたテレビスタジオの床に AIBO をそっとおき、正面に回りこんで「お座り！」と笑顔で話しかける黒柳氏。しかし、設計者が想定していない輝度の照明が照らされていたからか、全く反応を示さない AIBO。何度話しかけても、反応を示さない AIBO。徐々に周囲のタレントが「？」という雰囲気になっている中、熱心に我が AIBO に話しかけ続ける黒柳氏。それでも反応を示さない AIBO。「今日は機嫌が悪いの？」、「疲れちゃったの？」、「みんなの前で緊張しているの？」と AIBO に話しかける黒柳氏。ほかのタレントの「？」という視線や番組の進行などは完全に眼中になく、本気で AIBO の調子（体調？）を心配している黒柳氏…

そのときの彼女は、トーク番組に出演している女優ではなく、ただひたすらに AIBO の体調を案じる一人の AIBO オーナーそのものであった。黒柳氏のこの行動は、我々のような人工知能の研究者からすると、奇妙なものに映るかもしれない。しかし私は、その行動にこそ人間・人工物（エージェント）インタラクションの真髄があると考えた。この彼女の行動は、我々が日常的に観察する、子供がぬいぐるみを肌身離さず持ち歩くこと、A-Boy がゲームの美少女キャラクターにのめりこむことと、何ら違いはない。これらに共通しているのは、人間がインタラクションの対象である人工物を「かけがえのないパートナー」として認識しているということである。人間が人工物に対してこのようなかけがえのなさを感じている状態こそ、インタラクションが成立している状態であると私は考える。他人がどう思おうと構わない。本人が満足であるのならば、それで十分なのである。

人工物が「かけがえのないパートナー」となるには？

筆者は現在、この難題に立ち向かうべく寝食を忘れて(?) 研究活動に没頭(?) しているのだが、その実現のためには数多くの考慮すべきポイントがあることは自明で

あろう。例えば、人工物のデザイン、人工物に備わっている機能、そしてそれらデザインと機能とのバランス、インタラクションを行う環境、といったものがそのポイントとして挙げできる。その中でも、私が最も重要なポイントだと考えているのが、「人間はどのような情報をもとに、人工物を認知するのか、人工物に対する第一印象を形成するのか」ということである。例えば、犬を飼ったことのある人は、AIBO に対して犬のような行動を期待し、その行動に犬の面影を見ることで好印象を AIBO に抱くかもしれない。その一方で、犬を飼ったことがある人でも、AIBO の行動が完全な犬の行動とは異なることに気づくことで逆に悪い印象を AIBO に抱いてしまうかもしれない。このような個人的な履歴の影響のほかにも、ステレオタイプ（例：人工物の価格やマスコミ露出度）、個人的な嗜好（例：かわいいものが好き、媚びたものは嫌い）の影響などのさまざまな情報に基づいて人間は対象である人工物を認知し、それに対する「第一印象」を形成することで、その人工物に対する態度を決定していると考えられる。

もちろん、当初抱いた第一印象が、インタラクションの経過とともに変化することで獲得損失効果などが起こるとも考えられるが、何よりもまず、「第一印象から決めましたっ!!」という懐かしい流行語に代表されるように、第一印象が人間の行動に与える影響の大きさは計り知れない。どのようなインタラクションであっても「第一印象」からすべてが始まる。よって、この第一印象をどう扱うかによって、人間に人工物とのインタラクションを動機付けることができるのか、さらには人工物をかけがえのないパートナーと人間に感じさせることができるのかが決まるといえよう。このような第一印象の影響を踏まえて、人間が人工物に対してかけがえのないパートナーとってしまうようなインタラクションのモデルを提案することが、現在の私の研究の目標であり、今後の研究活動への抱負でもある。そしてこの研究アプローチは、人工物を賢くすることに重点を置いてきた従来型の人工知能研究に、人間側の認知的な適応特性を利用するという新しい風を吹き込むことができるのではと期待している。

このような研究を進めるにあたり、実際に黒柳氏が AIBO にどのような第一印象を抱き、どのようにして「かけがえのないパートナー」として認知するようになったのか、ぜひとも彼女に聞いてみたいと考えているが、AIBO に 10 分触っただけで飽きてしまった私と話がかみ合うかはまた別の問題であろう。